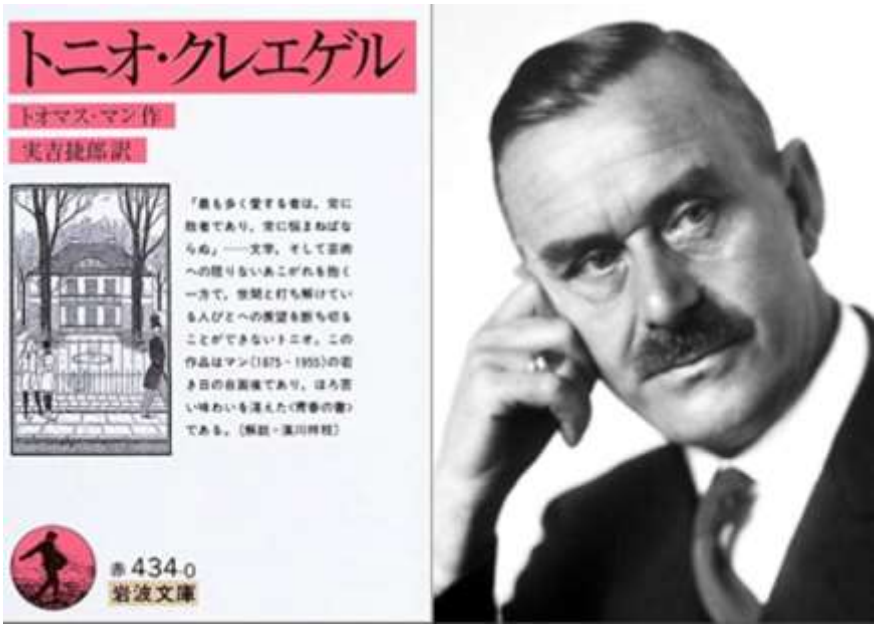
信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　トオマス・マン　『トニオ・クレエゲル』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）



第 238 回のツイキャス読書会の課題図書は、梶井基次郎　『ある心の風景』 です。

青空文庫　トオマス・マン　『トニオ・クレエゲル』

朗読しました。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

メルマガ読者　hoyo さん

トニオは自分自身と再会する

人が旅に出る目的とはいったい何だろう？
退屈な日常からの逃避というのが一般的な答えかも知れない。

新しい土地で素敵な出会いやとんでもない事件に巻き込まれるかも…

そんな風に欠片も思わず旅に出る人はいないような気がする。

トニオは作中で過去と出会うため旅に出た。
故郷では特に事件らしい事件は起こらず、ちょっと特殊詐欺の首謀者に間違われて職質を受けたくらいだ。

だが、デンマアクの海を望むホテルで、彼はハンスとインゲボルグを見た。

本当にこの二人はあの二人であったのだろうか？

私は、このハンスとインゲボルグは他人の空似であったのではないかと思う。

故郷の街ですれ違ったなら、それは本人の可能性も十分あるだろう。しかし、故郷から遠く離れた外国で、待ち合わせもしていないのに偶然に出会うことなどあり得ない。

彼らは会話らしいことも何もしていない。トニオだけが一方的に彼らだと決めつけ、暗がりから伺っているだけなのだ。

所詮、旅というのは何事もなく終わる、すべからく。

しかし、トニオにとってのハンスとインゲボルグとは何なのかと考えるとそこから一歩進んだ考えへとたどり着く。

結局、彼らはトニオのような世の流れからちょっと迷い出た俗人にとって、永遠の憧れでありリア充であり望みであり光なのだ。

だから、異国で出会う金髪の陽キャのカップルは全てハンスとインゲボルグと言うことが出来る。

彼は過去と向き合った。そしてそれを理解した。
トニオは、彼らからは絶対に理解されない。けれども、彼らをずっと愛するということを。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　香川さん

『香川、パンツ脱いだってよ』

表現のあれこれを語る際に、″パンツ脱げよ″という言葉がある。これは、″ええカッコしてやんと、てめえの腹の内を見せろや″という意味であると私は捉えている。何かを表現する時、どうしても見栄を張ったり、自分を大きく見せようとしてしまう時がある。あるいは自分が思っている以上に自分を小さく見せようとしてしまう時がある。技術を凝らし、本当に自分が思っている事は隠す。何故そんなことをするのか。恥ずかしいからだ。恥ずかしいし、もし、本音を見せたところで、それを誰かに否定されたりしたら傷つくからだ。誰も傷つけたくない、という言葉の裏側には、自分が傷つきたくない、という思いがある。何を好き好んで、わざわざ人前でパンツを脱ぐ必要があるのか。だが、私の心を揺さぶるのはいつも、てめえのパンツの向こう側なのだ。

河出文庫版『トーニオ・クレーガー』の解説には、吉行淳之介、三島由紀夫、北杜夫、という名だたる作家がこの作品に大きな影響を受けていたことが記されている。フランツ・カフカがこの作品の熱心な読者であったことは、有名な話だ。何故これほどまでにこの作品は多くの人々を熱烈に魅了するのか。それは、この作品はトーマス・マン自身がパンツを脱いだ作品だからだ。読者は全裸マンに自分自身を見出すからだ。子供の頃にこっそり詩を書いていたこと、自分を否定する事に酔っていたこと、やがて芸術に触れ、人を見下すようになったこと。書き上げればキリがないが、この作品で描かれるあらゆるエピソード、あらゆる芸術論は、今改めて読んでみてもかなり恥ずかしい。トーニオが言う、半分は嘘だが半分は本当だ、という言葉には、照れ隠しが見える。

10 数年前、初めて本書を読んだ時、かなり頭をヤられた。どうヤられたかというと、トーニオは俺だ、と本気で思っていた。マンも三島もカフカも、俺と同じ気持ちだったんだ、と本気で思って、本気で嬉しかった。今も割と本気でそう思っている。というのは、半分嘘で、半分本当だ。

パンツを脱いだ作品好きにとって、パンツを脱いだ作品というのは、パンツの向こう側、そう、魂のアビスで互いに共鳴し合うのだ。

この作品が好きだ、と言うのが恥ずかしい。何故なら、この作品が好きだと言うこと自体が、私にとってはパンツを脱ぐことだからだ。

ずっと胸の内に秘めてきた、私のパンツの向こう側、私のトーニオ・クレーガー。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　さくらさん

『トニオ・クレエゲル』感想文

この作品も難しくて、あまりよく分からなかったのですが友達のことについて考えさせられました。

トニオはハンスの事をすごく好きでそれは友達として大切に思っていたのだと思うけど、でもハンスはそれほどでもないというのが、本人も分かっているところが切ないなと思いました。

トニオが『ドン・カルロス』という本を貸してあげようとするけど、「いや、よそう」と断られてしまう。（岩波文庫　P.18）
私は以前、読書友達にドストエフスキーの「罪と罰」を貸してあげたら、「どうしても読めそうにないから返すね。」と言われてしまった。

私も初めて読んで、長くて難しいけど面白いところもあるから読んで欲しいなと思って貸してあげた事を思い出しました。

私は、昔からみんなに読まれている題名は知ってるけど内容の知らない本を読みたいと思うのだけど、友達が好きなのは現代作家さんが書かれているような作品だと言う事に後で気付きました。
私も東野圭吾さんの作品とか読んだりしたけど、やっぱり夏目漱石とか読みたいなと思いました。

作品の中にも

（引用はじめ）

彼がハンスを愛しているのは、第一にハンスが美しいからだった。しかし第二には、ハンスがあらゆる点で、自分の逆であり、裏であるように思われたからなのである。（P.15）

（引用おわり）

たしかにそうだと今更ながら思いました。自分と違うからその違いに惹かれる部分もあるし、でもなんとなく一緒にいると楽しいのが友達だなと。友達は少ないけど、そう思いました。

別の友達が、子供が学校で覚える元素記号を歌で覚える！　というのがあるらしくて、それが面白くて一緒に覚えたよ！　と言われたけど、数学とか理科とか大嫌いな私は一切興味を持てなくて申し訳なかったなと反省しました。

実際、学校に行ってた時も元素記号を覚えようと思った事ないから無理もないかな？覚えたいとも思わなかったな……。と思いながら、これからは友達に自分の趣味を押し付けるのは止めようと心に誓いました。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　TOTO さん

『トニオ・クレエゲル』トオマス・マン　感想文

一度読んだだけでは、なかなか理解することが出来なかった作品だった。
辞書を片手にしてもとても難しかしく進めなかった。

それなのになんだか感情が入り込んでしまい胸騒ぎがし、そして切なくて悲しいくて、惹かれてしまっている。

幼い頃のハンスとトニオ、インゲボルグとトニオ。
小学生の時そんな経験があった。昔を思い出しその時の悔しさがよみがえってしまった。

しかし、トニオはかなり違う。大人になってもハンスとインゲボルグをずっと変わらず愛し続けている。

（引用はじめ）

「僕は君たちを忘れていたのか、とかれは問うた。いや決して忘れたことはない。ハンス君のこともインゲ、君のことも。僕が働いたのは君たちのためだったのだ。　中略
インゲボルグよ、君を妻として、ハンス・ハンゼンよ、君のような息子を持つことができたら」（岩波文庫　P.114　～115）

（引用おわり）

このような愛の形があるものなのだ。恋愛、人間愛、彼の心の形成はどこから来るのだろうか。とても考えさせられたが答えは出なかった。

祖母と父が死に、「母は音楽家と青霞む遥か彼方へ行ってしまった」
トニオはおそらく母のこの出来事が引き金だと思うが、故郷を見捨ててしまう。

彼が「精神と言語の力」に身を委ねたのも、この惨めな経験からだと思った。

天職を持って働くことが、この愛する二人のためであったのだ。二人の愛の為に働くという信念が彼を支えていたのだと思うと切ない。それでいて実らない愛。
だから本当の愛であるとも感じる。

小さい頃過ごした「父と母の家」が「民衆図書館」に変わり、「朝飯の部屋」「寝室」「祖母の亡くなった部屋」「最初の詩をしまっておいた引き出し」ずっと忘れない胡桃の木。全て見捨ててきたのだ。

しかし、見捨てたその俗物的な、凡庸な市民の生活の中に、未だずっと、そしてこれから先も存在し続けていく自分がいることに、トニオ自身が気づいたのだと思った。

そしてそこには、詩と文学が確実にあるのだと彼は感じたにちがいない。

※無断転載禁止

もう一度家族への愛を発見する、この経験が彼の心を変えて行くのだ。分岐点になるのことが描かれている。

この体験なしに彼の人生の出発点はないと思う。

彼の葛藤、悩み苦しみは続くと思うが、文学と愛に支えられている。

映画「ニューシネマパラダイス」の音楽が聞こえてくる。同じ切ない感情がわいてくる気がした。この映画の主人公もトニオと似ている。昔の風景。今の自分。

「一人の俗人だというんです」と言い切ったリザベタ・イワノヴナ。
その時の二人の会話のトニオの語る言葉はあと何回読めば理解できるのだろう。トニオの苦しみ悩みは教養の賜物であるが難解であった。

ただ、リザベタが彼の本当の友人であることだけはわかった。
最後の手紙が本当にお互い分かり合えているようで素敵だった。

短編なのにとても難しかった。
「魔の山」は私にわかるだろうか。

でも、いつか読んでみたい。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　玉井さん

機関車マン

本書『トニオ・クレーゲル』の主題ともいえる文学者の苦悩とは一体何なのか。

本題に入る前に、夏目漱石の講義録『文学評論』における「作品の評論における読者の態度」を以下 3 点紹介する。
※文学評論(上巻),第一編参照。

①鑑賞的態度・・・自己の趣味嗜好により評価
②批評的態度・・・作品を分解し科学的見地により評価
③批評的鑑賞・・・自己の趣味嗜好から出立して科学的手続きの上で作品を評価

上記について漱石は、「①感傷的態度」は愛好家の態度であり批評には該当しないと切り捨て、次に「②批評的態度」については、文学は科学ではないが批評または歴史は科学だとしている(可能性として提示)。そして、世の中の批評は「③批評的鑑賞」によるものが主であるとし、③に関してだけは漱石の苦悩が見て取れる。なぜなら、古今東西において「趣味の普遍性」はないにも関わらず、自己(＝評者)が得た趣味という者が標準となって批評が出立するからであり、したがって全読者に満足を与えることはできないと漱石は長々と論じた上で生徒に詫びている。

本書『トニオ・クレーゲル』におけるトニオも前述③と同様に創作者の立場から苦悩している。
ここでトニオの芸術家としてのあるべき姿を以下に抜粋する。

<<彼は生きるがために働く人間のようには働かなかった。彼は労作以外の何物も欲しなかった。―中略―　すぐれた作品というものはただ苦しい生活の圧迫のもとにおいてのみ生まれるということや、生きる人間は労作する人間でないということや、創造する者になりきるためには死んでいなければならぬということなど一向にご存じない小人どもを心から軽蔑した>>　（新潮文庫 P.43）

上記は、芸術家は生活とは分離した存在であるといった主張だが後に、リザヴェータから　<<道に迷った俗人>>P.67 なだけではないかと抗議されており、旅行の終わりに彼は　<<悔恨と郷愁にすすり泣いた>>P.116。故郷でのハンスおよびインゲとの別れ　――　それは生活・俗物を疎外することになった要因に過ぎず、つまり彼は旅行において自己を再認識した結果、芸術と生活の分離が叶わず泣いたと読み取れる。リザヴェータへの手紙では、<<俗人的良心>>P.118、<<俗人的愛情>>P.119 という言葉を用いて　<<根源的で宿命的な芸術気質がある>>P.118 という自分の存在に気づくことになる。

以上のことから、芸術と生活の分離というのは前述の「③批評的鑑賞」と同様に困難であり、創作者・評者のそれぞれの立場を取っても自己という存在に囚われ続けるため真に成立することはない。そういった苦悩が本書の主題と思われるが、物語はトニオの手紙で唐突に終わってしまう。そのため彼の文学がその後どういった変化を遂げたのか描かれていないのが少々残念なところである。

といったことを考えながら、とりあえず『君は…人のために死ねるか？　あいつの名はトーマスマーン！！！！』と歌ってみた。

（おわり）

※無断転載禁止

きみは読書なんてしない

私がトニオの立場だったら、食堂でのダンスパーティーをガラス扉の陰で覗き見するだろうか？
多分しないと思う。
ハンスとインゲの世界は、今世では自分と無縁だったということで、納得させると思う。

ショウペンハウエルやニーチェなどのドイツの哲学書を読んでいると、脱俗して芸術の世界に没入することが、人間として尊いように感じるが、それは、あまりに超人的な孤独の苦痛を伴うので、彼らを真似ようとすると、激痛で、思わず目眩がする。
私も学生時代にポエムを書いて、文芸誌に投稿したことがあるが、結局のところ、そんなのは、承認欲求の何物でもない。掲載されたとしてもポエムを理解してくれる友達など、ほぼいないし、掲載されたことを話しても、気味悪がられるのがオチである。

最近、自分に表現したいことなどあるのか、とつくづく思う。自分が生きている現実こそ、すでに自己表現であり、詩を書いたり、絵を描いたりしなくても、日々の自分の行動も、自覚がないだけで、作為に満ちている。その作為は、創作と言えるほど、意識的ではないだけだ。作為がない人間はいない。つまり、嘘をつかない人間はいない。嘘は、一つの自己表現だ。

（引用はじめ）

（内面的に他の人々よりもずっと窮している者は、多少の外面的愉楽を当然要求して差支えない、と彼はいつも言っていたからである） 岩波文庫 P.72

（引用おわり）

私は、カントやショウペンハウエルのように、人生をかけて自分の哲学体系を、完成するというのは立派だと思うが、トオマス・マンのように大長編作品を書くというのは、あんまり、尊敬できない。書いているうちに、その苦痛ゆえに、性格が歪み、自己正当化が激しくなり、世間に向けて、結局、売れようが売れまいが、被害者ヅラしはじめる傾向がある。
小説は、なんか人騙し的な要素があり、胡散臭い。トニオのように自分の創作哲学みたいなものを展開して、俗人を遠巻きに非難するというのは、みっともない、と読み直して思う。
しかし。そのことは、作品内でちゃんと批判されている。リザベタさんが正しく指摘した通り、それこそ、俗人の行為である。
己が俗人だと気づいていない俗人のユーモア小説だと思って読めば、優れた小説だと思う。
つまり、トニオの絶望は、キルケゴールが『死に至る病』で喝破した、絶望を意識していない絶望かもしれない。
リザベタを前にした、トニオには、金を払って、サービスを受けておいてから風俗嬢に説教する殿方みたいな滑稽さがあった。
しかし、その滑稽さゆえに、トニオのことが気の毒で、彼の身になって読むほどに、哀しくなった。

（おわり）

※無断転載禁止